



活動現場から、「このたびカタチになりました」

次世代に、地域の歴史や暮らしの文化を伝えたい

児童館で子どもたちが見入るのは、仙台市若林区沿岸部の暮らしの様子を描いた手作りの紙芝居です。毎年冬になると沿岸部の田んぼに飛来する白鳥を主人公にした作品では、白鳥が、地域の支え合いで営まれる農業に触れながら、つながりの大切さを学びます。稲わらや、ゆずり葉などをキャラクターにした作品では、冬の生業として地域に根づく、しめ縄づくりを描き、地域特有の正月文化を伝えます。紙芝居を作ったのは、学生団体「若林元気隊」です。地域行事の手伝いや、震災伝承に取り組んでいます。紙芝居には、荒浜や六郷、七郷地区の住民へのインタビューを通じて知った、地域の魅力を詰め込みました。

東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた若林区沿岸部には、災害危険区域に指定され住むことができないエリアもあります。メンバーのほとんどは、同エリアの復興支援に携わってきた経験があり、地域への愛着はひとしお。「この地域の人の温かさ、助け合う暮らしが大好き」と話すメンバーの松本春花さんは、「人口減少、住民の高齢化も進み中、暮らしの文化継承がますます大切だと感じる。インタビューから伝わってくる皆さんの“ふるさと”への思いを形にして伝えていきたい」と、思いを込めます。

若林元気隊

市内の大学に通う10人ほどのメンバーで2025年から始動。代表の武元気さんは、「地域の方々のやりたいことを応援していきたい」と意気込んでいます。



Instagram



▲子どもたちから「この場所知ってる」「これ食べたことある」などの声。



▲白鳥のハックが山菜取りを通じて食文化を学ぶシーン

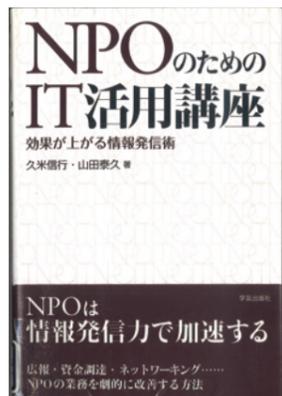


活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

NPOのためのIT活用講座 効果が上がる情報発信術

市民活動やボランティア活動に取り組むなかで「自分たちがどんな活動をしているのか、知られていない」と悩んだことはありませんか。活動の様子や所属するメンバーの思いを知ってもらい、共感や信頼を得ることが、活動を長く続けていくために重要です。本書ではITを活用した情報発信の工夫が具体的な事例とともに紹介されています。例えば、自分たちが開催しているイベントの様子をSNSに投稿する、メンバーが活動に参加したきっかけをブログで発信するという方法です。本書を読んで、ITを活用した情報発信を始めてみませんか？

著者 久米信行、山田泰久
発行所 株式会社学芸出版社



はねっと 3

仙台市民活動サポートセンター通信 はねっと

“はねっと”には、仙台市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

特集

自分も経験したからこそ、寄り添いたい
ピアサポートの輪を広げる



一歩踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

目の前の人「また頑張ろう」と 思えるように寄り添いたい

Five_up_SENDAI 代表
稲富 慎二郎さん(44)



稲富さんは約20年にわたり、消防士として人命救助に携わっています。2024年5月に消防職員の仲間とFive_up_SENDAIを立ち上げ、ユンボなどの重機やチェーンソーを用いた災害ボランティア活動をしています。活動するうえで稲富さんが大切にしているのは、自分たちがやりたい支援ではなく、被災した人との対話を通して、その人にとって必要な支援を届けることです。災害が起きた際は現地へ赴き、倒木などにより寸断された道路啓開、壊れかけた建物から貴重品や思い出の品を取り出すといった復旧作業にあたります。現地のボランティアセンターや全国から駆けつけたボランティア団体との情報共有や連携も欠かせません。これまで能登半島や、水害に遭った東北各地で力を発揮してきました。

「活動を始めた動機は、自分の重機操縦のスキルを上げるためだった」と、明かします。2019年の丸森町大規模水害発生時、署内の「重機隊」として被害対応にあたった稲富さんは、思うような操縦ができず、挽回したいという思いがありました。「インフラの早期復旧に貢献できるとはいえ、自分本位な理由で被災地に行っていました」と、団体結成前の当時の自分を振り返ります。

稲富さんの考え方を変えたのは、被災地で活動していたボラ

ンティア団体の人の「泥ばかり見ず、人を見る」という助言です。被災地に行く目的は復旧作業を行うためだけではなく、その先にある、被災した人の今後の暮らしを支えるためだと考えるようになりました。稲富さんは、「被災した人の生活再建を支えたい、そのために磨いたスキルを活かしたい」と、思いを新たにします。



▲土砂に埋もれていた、倉庫内の三輪バイクを運び出すメンバーたち



▲重機を使って、土砂と一緒に流れ着いた流木を撤去する様子

Five_up_SENDAI

メンバーは現在14人。被災地での支援に加え、土砂災害防止等を目的に森林整備も行っています。今後、全国各地での災害支援の経験をもとに、宮城県の防災力を高めるための活動を検討中です。



Instagram

つながる つなげる サポセン

仙台市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 3月11日(水)、25日(水)

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00
日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日)年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
[ホームページ] https://sapo-sen.jp
[サポセンブログ@仙台] https://blog.canpan.info/fukkou/

「はねっと」バックナンバーは
ホームページからダウンロードできます。



ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行 仙台市民活動サポートセンター @SCSC4CA [X] サポセンちゃんねる [YouTube]
(指定管理者: 特定非営利活動法人 せんだいみやぎNPOセンター)
発行日 2026年3月1日
デザイン PEACE Inc.



協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」



特集

自分も経験したからこそ、寄り添いたい ピアサポートの輪を広げる

現代の日本では重い障がいとともに生きる子どもの数に対して、受け入れ先となる施設は不足している状況にあります。24時間のケアを担う家族は、睡眠不足や社会的孤立などの課題を抱えがちです。そうした中、同じ経験を持つ人同士が支え合う「ピアサポート」に期待が高まっています。社会福祉法人あいの実と、仙台市健康福祉局障害福祉部障害者支援課による協働プロジェクト「ほのびあ」をご紹介します。



「カフェ・ドゥ・チルミル」で働く母親たち

医ケア・重心の
ファミリーサポートはじまる！
SWCあいの実×仙台市



仙台市健康福祉局
障害福祉部障害者支援課
地域生活支援係（以下、障害者支援課）



障がい者が安心して地域生活を送るための取り組み立案や、障がい福祉サービスの制度管理を行う。

社会福祉法人あいの実
（以下、あいの実）



医療的ケア児者や神経難病者とその家族への支援を行い、制度だけでは解決できない問題にチャレンジしている。

あいの実と障害者支援課は、ピアサポートを必要としている人たちへの支援を広げるプロジェクト「ほのびあ」を2025年度から開始しました。重症心身障がい児者・医療的ケア児者の母親が、自らの体験をYouTubeで発信するライブ配信のほか、仙台市内各区で子どもの介護について語り合う交流イベントや個別相談を開催。母親自身がピアサポートの担い手となるコミュニティづくりを目指しています。

プロジェクトの原点は、あいの実が仙台市泉区で運営するカフェ「カフェ・ドゥ・チルミル」にあります。カフェは、重症心身障がい児者・医療的ケア児者の母親を中心とした家族の就労機会を生み出す場として2024年に開設され、現在5人の母親が働いています。テレビ番組で紹介されたことをきっかけに、同じ境遇にいる家族が多く訪れるようになりました。そこで自然に生まれたのが、「うちもそうだったよ」「こんな工夫が役立ったよ」という共感や情報交換です。この助け合いの風景が、ほのびあへと発展しました。

※重症心身障がい児者：重い身体障がいと重い知的障がいをあわせ持つ子ども・大人。
※医療的ケア児者：人工呼吸器の装着、胃ろう、痰の吸引など日常的に医療的ケアが必要な子ども・大人。

1
ねらい

壁を越えて
ピアサポートの輪を広げたい



重症心身障がい児者・医療的ケア児者の家族にとって、働き方や暮らしの悩み、将来への不安など、抱える課題は多岐にわたります。泉区以外の家族がカフェに相談に行こうにも、人工呼吸器や痰の吸引器などの医療機器を持ち運ぶ必要があったり、急な体調変化への不安もあったり、遠出をすることが簡単ではない場合も多かったです。ピアサポートを、市内各区に広げた背景には、「もっと気軽に相談し合えるコミュニティが身近にあったら」という思いがあります。実現に向け、日頃からつながりのあった障害者支援課へ協働を提案。一方で障害者支援課は、ピアサポートの重要性を認識し、支援体制を検討したいと考えていました。当事者のニーズ把握や、実施効果などのデータ収集のため、あいの実と力を合わせることに。実施にあたり、市との協働によって地域の課題解決を図る「市民協働事業提案制度」を活用しました。



▲交流イベントの様子

2
ポイント

「一人じゃないよ」。
強みを持ち寄り、届けた思い



ほのびあ開始前、カフェで働くスタッフの一人は、「子どもに胃ろう手術をするか迷っている」という相談を受けました。3人の医療的ケア児を育ててきた自身の経験をもとに言葉をかけた時、「自分の経験が誰かの役に立つという確かな手ごたえを感じた」といいます。現在も、ライブ配信や交流イベントに集う一人ひとりの経験が、互いの力になっています。

親たちにとってより良い交流拠点をつくるために、どのような事業を展開したら良いか、あいの実と障害者支援課は、互いに率直な意見を交わす「壁打ち」のような対話で、企画を磨いてきました。また、障害者支援課の働きかけにより、交流イベントや個別相談の周知には、各区の福祉関連課も協力。広報体制が整ったことで、2025年度には新たに28組の家族とつながることができました。



3
これから

つながる場をともに支えていく

障害者支援課は、ほのびあを通じてつながることができた家族の実情を踏まえ、ピアサポートを含む包括的な支援のあり方を引き続き検討していく方針です。あいの実は、重症心身障がい児者・医療的ケア児者の家族が「今を生きる」だけでなく「生きがい」と「生きやすさ」を感じながら、ともに支え合う未来を描いています。



ほのびあ



▲HP